

伝統建築の基盤をなす木の文化

修理は価値を損ねる改変ではなく、
使い続けていくための知恵の具体化

約半世紀ぶりの修理が終わった京都府東山区の清水寺本堂(国宝)は、檜皮葺の屋根が美しい。現在の本堂は江戸時代、寛永年間に焼失し、徳川家光の命で再建されたものだ。昭和の修理では厚さ75センチに葺いた檜皮を今回は江戸期の文書にあった96センチに厚くした。

檜皮は樹齢100年近い檜の立木から剥いて採取した外樹皮である。用途別に整形し、規格品のような皮を作る。葺き替えの際は、竹釘を打って皮を留めながら等間隔にずらして重ねていく。採取と葺き替えは別の専門技術で、それぞれに経験を積んだ職人がいる。

檜皮採取や檜皮葺、彩色や漆塗など木造建造物に関係する17の技術が「伝統建築工匠の技」としてユネスコの無形文化遺産に登録された。日本には清水寺など世界文化遺産になった木造建築が数多くある。伝統の木工技術はこれらの遺産を後世に残していくには欠かせない。今回は、この技も世界的に高い価値を持つと評価された格好だ。

日本の多くの歴史的建造物は焼失して建て直されたり、解体を伴う大規模な修理を経たりしてきている。形や大きさが少し変わったり、傷んだ材が新たな材に取り換えられたりしてきた。このため、世界文化遺産への登録ではかつて、文化財としてのオーセンティシティー(真正性、本物性)が失われているのではないかと疑義が出されていた。歴史的建造物がほぼ石造である欧州の専門家指摘だった。

これに対して、オーセンティシティーは各文化の中での伝統なども加味して判断されるべきだという考え方が1994年に奈良市で開かれた世界文化遺産の会議で打ち出された。木造建造物は年月を経る中で傷み、修理されるのが普通だ。最初のものにしか価値を認めない考え方は木の文化を土台にした日本の建造物の評価にはなじまない。奈良会議で基準が見直された後、日本の社寺建築が多く世界遺産に登録されるようになった。文化の多様性を認

めた奈良会議の合意文書は文化遺産の概念を無形文化財にも広げる契機になったといわれている。今回登録が決まった伝統建築技術への評価は、27年前の会議がもたらした変化の延長線上に生まれてきたといえるかもしれない。

「日本の伝統建築は修理をしながら使い続けることを前提につくられていく。2つの木材をつなげる継ぎ手、仕口は、複雑な形状であっても外せる。後世の修理を想定しているからだ」。伝統建築に詳しく、文化庁の作業部会のメンバーとして伝統建築工匠の技の無形文化遺産提案に関わった矢ヶ崎善太郎(大阪電気通信大学教授)は語る。

技は修理の現場で磨かれ、修理する時代の新しい技術が入り入れられ、工夫が積み重ねられてきた。日本の伝統的な木造建造物にとって、修理は価値を損ねる改変ではなく、使い続け、後世に伝えていくための知恵の具体化なのだ。解体修理では傷んだ材だけを取り換え、使える材は残す。茶室のように手を加えることが由緒の累積と見なされて逆に価値を高める建物もある。

現在修復工事が進む京都市下京区の西本願寺唐門(国宝)には唐獅子や孔雀、鳳凰、麒麟などの彫刻が飾られ、華麗な桃山文化を今に伝える。修復では剥落した彫刻の表面を塗り直しているが、この「建造物彩色」もユネスコの無形文化遺産になった技だ。今回、鶴の彫刻は劣化が激しいため、最新機器で3次元計測したうえで新たに模刻した彫刻を取り付けることにした。

後世の修理を妨げるようなことはないが、減したり危険が増したりする恐れがあるものは放置しない。「手を加えずにそのままに努めながら、最新の技術や製品で使えるものは使っている(京都府文化財保護課)。清水寺も含め、近年の伝統的な木造建築の修理では、耐震のために金属で補強するのも当たり前になっている。

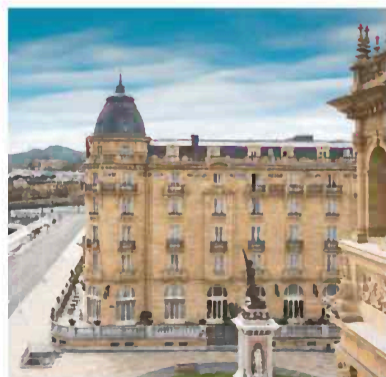
修理の際、昔の職人の見事な仕事に驚いた経験を持つ人は多いという。それが時を超えた後世への伝言だとすると、それを聞き取る力、木の文化についての感性を育てなければならぬ。「国や自治体が文化財に指定していない建造物の修理で伝統的な建築が減っている」。檜皮葺など屋根の技術の伝承をしている全国社寺等屋根工事技術保存会の大野浩二会長は心配する。裾野が細れば頂は低くなってしまふ。世界に誇る技術を守るためにも、木に親しみ、木を知る人を増やしていきたい。



修復作業が行われる西本願寺「唐門」の彫刻(京都市下京区)

堀田昇吾
玉井良幸撮影

極上事始



高級ホテルでバーチャル海外旅行 高級ホテル「ザ・プリンスギャラリー 東京紀尾井町」(東京・千代田)は、スペイン・バスク地方のサンセバスチャンへの海外旅行をバーチャルで体験できる1泊2日の宿泊プランの提供を始めた。3月31日チェックインまで。

プラン名は「JOURNEY to SAN SEBASTIAN」。美食の街として知られるサンセバスチャンの「ホテル マリア クリステーナ、ラグジュアリーコレクションホテル」(写真)とコラボレーションした

本場の味覚によるディナーコースが、現地の街並みやバル巡りの映像が流れるスイートルームで楽しめる。ディナーの内容はコラボ先のシェフ監修によるバスクの伝統料理やタパス、バスクチーズケーキなど。1人6万7762円(1室2人利用時)より。

ザ・プリンスギャラリー
東京紀尾井町
TEL 03・3234・1111

洗練逸品



スポーツのお供に 仏高級ブランドのルイ・ヴィトンはヨガマットなど、スポーツをする時に使う商品の販売を始めた。それぞれモノグラムキャンバス生地などを随所に使ったデザインとなっている。ヨガマット(写真、税抜き25万4000円)は滑り止めつきで実用性を持たせながら、全体にロゴを配したルイ・ヴィトンらしいデザインとした。モノグラムのキャンバス生地を使ったストラップやカードホルダーもつけた。テニスラケットケース(同21万円)はモノグラム生地とヌメ革で

作られており、ポケットの中にはロゴ入りのテニスボールが3つ入っている。フラスコホルダー(同22万2000円)は保温機能付きのボトルと、モノグラム生地のボトルホルダーをセットにした。それぞれ全国のルイ・ヴィトンのショップや公式サイトで販売している。

ルイ・ヴィトン
クライアントサービス
TEL 0120・00・1854